

日本記者クラブ会報

第 474 号
2009 年
(平成21年)
8月10日発行

〒100-0001
東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
日本プレスセンタービル
◎社団法人 日本記者クラブ
http://www.jnpc.or.jp

8月17日午後1時

「6党党首討論会」を開催へ

昨年9月の麻生政権発足直後から「解散時期」をめぐる政局がドラマ長いこと続いたので、この政治部もアゴをだし疲労困憊なのではないだろうか。

そのうえ戦後最長40日間の事実上の選挙戦。まさしく政治記者の真骨頂が試される夏になった。先月訪日したキャンベル米國務次

一つは「解散時衆参で5人以上の議員」で、もう一つは「直近の総選挙または参院の通常選挙で、有効投票総数の100分の2以上の得票」ということになる。

クラブ主催の国政選挙での「党首討論会」はこんどで10回目になる。第1回は1990年2月2日だった。

5党代表によるものだったが、海部vs土井が主戦だった。結果は自民が安定多数の275議席で、社会は83から136議席に大躍進した。

あれは画期的な討論会で、池田自民総裁、江田社会委員長代行、西尾民社委員長による「3党首テレビ・ラジオ討論会」(1960・12・12)以来30年ぶりのことだった。そのこ

ともあって有権者の関心が高く、NHKだけでなく民放キー局も生中継した。NHKの視聴率は11・8%で、午後8時から行った再放送は15・3%だった。

今回も政権交代はもとより、選挙後の連立、再編などニュース価値が大変高いので、ペン取材の人数は各社単位での割当制にした。個人D会員

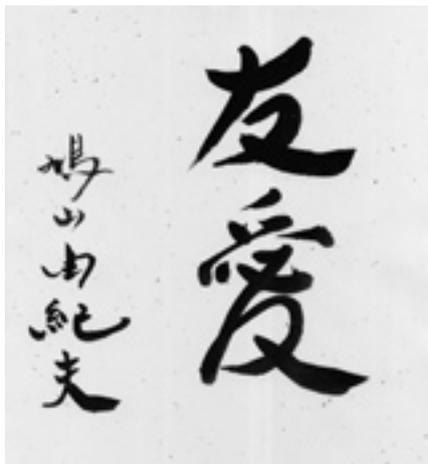
の皆さんは抽選にさせてもらった。現役の取材を優先せざるを得ないので申しわけないが、賛助会員の方や抽選にもれた会員にはNHKの生中継をご覧いただきたい。

■故・平田会員からの寄付金

3月25日に亡くなられた平田真巳会員(元共同論説委員長)の遺言執行人・戸塚洋子さんが、6月29日に事務局を訪れた。

「故人の遺志です」と、100万円を差し出された。平田さんには通算で11年間クラブの企画委員として協力していただいた。先に逝った東京新聞論説主幹の広瀬一郎さんとの名コンビで、貿易摩擦、土地問題などの研究会を精力的に企画し、司会にも当たってくれた。お二人などが中心だった「産業構造」の研究会は、『80年代の産業構造』のタイトルで、日本記者クラブ編として日経から出版されている。

お申し出の寄付金は理事会の承認を経て、ありがたくクラブ賞基金に繰り入れさせていただいた。クラブ賞への個人や各社からの寄付は、これまで約3800万円になった。一般会計予算からの繰り入れを含めて、現在の基金残高は約1億円になっている。(専務理事 岩崎玄道)



代表として「政権運営」の3原則を
発表した会見(7.10)での揮ごう

お届けした。会員の一部分からは、麻生さんと鳩山さんの頂上対決を企画すべきだとの声も事務局へ寄せられた。が、参加政党は、公選法、政治資金規正法が規定している、政党要件を両方も満たすところということになった(第389回企画画委員会決定)。

確認のため書くと、要件の

たなか こういちろう
田中 浩一郎 日本エネルギー
経済研究所中東研究センター長

7・2(木) 研究会「イラン大統領選挙後の政治危機」② 司会
脇祐三委員 出席 54人

▼革命体制 内部で大きな揺らぎが



イラン・イスラム共和国の政治体制を、イスラムと共和制の「ハイブリッド」と表現した。そのうえで、6

月の選挙と抗議デモへの対応で、共和制の部分が「色あせた」と断定。「強硬派学者の主張する『共和制廃止』という方向性に進んでいることを想起させる状態にある」とみる。アフマディネジャド大統領再選には、二つの意味が内包されているという。

まず、イラン版「チェンジ」はなにかを、ハメネイ最高指導者が対外的に宣言したことになる。核開発、米国との関係修復、中東和平など各問題への強硬姿勢は今後も変わらないということだ。

そして、国を二分するような政治問題が生じた際に本来は大所高所か

ら調停者として振る舞うべき最高指導者が、1人の候補に肩入れし、役割を放棄したこと。アフマディネジャド大統領が今後は強権的体質を強め、摩擦が増えると予想される中で、体制を安定させる仕組みがなくなった。

抗議に加わった人々を大統領が「チリやホコリ」と呼んだ。田中さんは「チリ、ホコリこそが公害のような外部不経済であり、体制を脅かすものだ。体制の安定はそれを取り込めるかどうかにかかっている」という。体制がこれを無視したままでは、不安定化は避けられない。

当クラブでは前々日に、松永泰行・東京外国語大准教授が同じテーマで講演。「長期的には、今回の抗議に加わった『緑の波』運動支持者が勝利する見通しもある」と語った。結論は逆だ。しかしハメネイ師を中心とした革命体制が内部で大きく揺らいでいるという肝心な点は共通している。目に見える大規模なデモはほぼ収束した。今後は、厳しい報道規制のなかで、目に見えない動きを見極める力が問われそうだ。

毎日新聞外信部

花岡 洋二

まつざわ ゆうすけ
松澤 祐介 西武文理大学専任講師

7・3(金) 研究会「世界金融危機下の東欧経済」司会 宮田謙一委員 出席 53人

▼東欧経済 西欧の景気回復次第

東欧・バルトの経済がきな臭い。ラトビアやハンガリーの経済危機が一段と深刻になれば、こうした諸国に貸し込んでいた西欧や北欧の銀行が経営難に陥り、金融危機が再び欧州全体に広がるのではないかと懸念されている。

東欧・バルトで何が起きているのか、日銀出身の松澤西武文理大学専任講師が現状をまとめた。

東欧・バルトと一口に言っても、経済の悪化度合いはまちまちだが、危機に陥っている国には共通点があるという。經常収支が長年大幅な赤字であること、金融機関は外資系が支配的であること、欧州連合(EU)に加盟前後から外資が大量に流れ込



み不動産バブルが発生したこと、外貨準備高に比べて外貨建ての短期債務が多いことなどだ。

2007年まではこの状態で高成長を満喫したものの、リーマンショックで西欧の金融機関がリスクに敏感になると途端に資金繰りに窮した。そのうえ、自国の通貨をユーロに連動させている国が多く、その場合外資が資金を引き揚げたからといって、中銀が自由に金融政策を発動できない悩みも共通していた。

これだけ聞いてみると、単に浮かれ過ぎだったのではないかとはいいたくもなる。しかし、松澤さんは東欧・バルトを責めることができるだろうか。ベルリンの壁崩壊、旧ソ連の崩壊を経て社会主義の軛を脱した各国は共産党支配下で失った豊かな日々を取り戻そうと必死だった。ようやくEU加盟を果たし、次はユーロ圏入りを夢見た。その間に起きた国内景気の過熱をバブルだと警戒するには経験が少なすぎた。

ラトビアやハンガリーでは今、国際通貨基金(IMF)の管理下で耐乏生活が始まっている。今後の経済見通しについて「西欧の景気回復次第」と語った時、松澤さんは新興国の辛さを共有していた。

日本経済新聞編集委員 栢 俊彦

おくむら
おみひろ
奥村 倫弘 ヤフーR&D 統括
本部編集本部メディア編集部長

7・6(月)研究会「雑誌・ネット・報道」
③ 司会 高畑昭男委員 出席 96人

▼ 転換期を迎えるニュースサイト

1日約3500本のニュース速報の中から、テーマ別に選んだ数本に、20人の担当者が新たな見出しをつけて読者に提示する「ヤフートピックス」。月間37億6000万ページビューを稼ぐヤフーニュースの大黒柱的存在で、日々の出来事をここで知る人も多いとされる。

奥村さんは自らの仕事を「報道機関がぜひ世に問いたいものを取り上げていく」と説明し、取材する機能は持たないものの「メディア」であると繰り返し強調。記事に盛り込まれなかった独自の情報をネット内で集めて、加味することで読者の知的関心にこたえていると胸を張った。会見の後半には、自らのジレンマの吐露が続いた。読売新聞記者としての経験を踏まえ、「社会に向けて警告を発する存在としてニュースがある」と話す。しかし、ネット



の中では関

覧数の多寡が優先し、大事なことが伝えられていないと嘆く。一例として2008年2月のコソボ独立をあげた。新聞各社が1面で大きく取り上げたにもかかわらず、トピックスのアクセスシェアは全体の2%程度。ネットの世界では「コソボは独立していない」と自嘲ぎみに語った。

ヤフーニュースは広告収入で成り立っているため、読んでほしいものよりも読まれるものを掲載したほうが収入は増える。実際、芸能やスポーツの閲覧数は格段に多いという。「お客(ユーザー)が喜ぶことを考えて、(掲載する)ニュースを選ぶのは危険だ」。読者迎合の傾向が強まれば、情報格差や知識格差が拡大するとの懸念を抱き、「読者に迎合した会社になったら(今の仕事を)辞めます」とまで言い切った。その上で、メディアとしての社会的責任を果たすため、「報道機関が培ってきたニュースの価値を保ちたい」とした。

報道機関と一線を画すことで存在感を増してきたニュースサイトが、転換期を迎えているのかもしれない。読売新聞IT事業部

日高 徹生

ガート・グロブラー
駐日南アフリカ大使

7・9(木)記者会見 司会 坂東賢治
委員 通訳 長井鞠子 出席 45人

▼ W杯成功に自信と確信

サッカーの2010年ワールドカップ(W杯)南アフリカ大会は安全に開催されるのか。最大の関心事に対し、予想通りとはいえ「W杯の開催は成功すると確信している」という答えが返ってきた。南アでは一日約50件、日本の約40倍もの殺人事件が起きていたが、07年に在留邦人と日本人旅行者が犯罪に巻き込まれた確率は0・6%だったとするデータを示しながら「南ア政府は治安と安全の問題を最優先して取り組んでいる」と強調した。



代表のユニフォームも南ア紹介

場の労働者ら約7万人が賃上げを求めて無期限ストライキに突入した、とのニュースが飛び込んできた。それでも大使は「数日のうちに片づくだろう」と楽観的な見通しを示した。コンフェデ杯期間中も試合のない日にはストライキが起きたが、運営に支障はきたさなかった。その経験が、自信となっているようだ。

W杯の予行演習に位置付けられた6月のコンフェデレーションズカップは、大きなトラブルもなく運営された。競技場周辺には人員過多としか思えないほど大量の警察官や民間警備員を投入。それが犯罪の抑止力となった。来年のW杯も人海戦術がとられるだろう。ただし、規制線の内側に限った対応ではある。折しも会見を前に、競技場建設現

報道陣との質疑を契機に「貧富の差、生活水準の低さが犯罪を生んでいる。格差を埋めなければ社会的な安定はおぼつかない。いまだ大きな格差が残っている」と述べた。W杯により瞬間的には雇用が改善され、治安対策も講じられるが、抜本的な対策にはならない。国際サッカー連盟もW杯組織委員会も言及しなかった点に、きつちり触れてくれた。加えて、10年は日本との外交関係樹立100年の節目である点もアピールした。出席者の多くは運動系の記者で関心は薄そうだったが、外交官としての役割を果たしていた。

毎日新聞運動部 江連 能弘

萩原 雅之 ネットレイティングス社
エグゼクティブ・フェロー

7・10(金)研究会「世論調査」
② 司会 川村晃司委員
出席 80人

▼世論調査のハイブリッド化を提唱

永田町における報道各社の世論調査の力は年々、強くなった。内閣支持率がときの政権の最期を告げる「死に神」役を果たすようになって久しいが、安倍晋三氏以降三代の自民党総裁の選出過程では、勝者を指し示す「女神」役も果たすようになった。誇張かもしれないが世論調査は日本の最高権力者の生死を司る「神」となった感がある。



インターネットなど新たな調査方法を模索してきた萩原氏は、「世

論調査だけは(ネット調査化に)歯止めがかかっている。良心がある」とする一方、電話や面接など従来の手法によっている世論調査にも「歪み」が出ていると指摘する。家族や個々人の生活形態、調査に対する個人の意識変化によって、対象が、「平日の日中、家にいる人」、具体的には主婦や高齢者に偏り、さらには調査曜日にこだわらなくなった報道各社の姿勢がそれに拍車をかけている、という。

その上で「固定電話を持たない若年層の意識をどうとらえるか」と問題提起した。さらに具体策として、電話、面接、郵送、ネットなど対象者が答えやすい方法を組み合わせる「ハイブリッド」を提唱した。

ハイブリッド化は、世論調査の「正しさ」に対するわれわれの意識の変化を誘発するかもしれない。その変化を否定的にばかりとらえる必要はないだろう。世論調査を相対的にとらえることにもつながるからだ。「中毒」から抜け出す機会としてハイブリッド化に取り組み意義はあると思いつながりながら講演を聴き終えた。共同通信政治部

柿崎 明二

鳩山 由紀夫 民主党代表

7・10(金)記者会見 司会 宇治敏彦
副理事長 出席 212人

▼一瞬のぞかせたひそかな野心

「民主党が描く政権の姿をお示しできれば」と勢い込んで切り出した。オバマ米大統領の「チェンジ」など世界的潮流に乗る「政権交代の必然性」から説き起こし、持論の「友愛」の理念、恒久財源17兆円を要する衆院選マニフェスト(政権公約)の骨格など練り込んだ語り口。所信表明演説の予行演習並みだった。



新政権マニフェストの指針とも言える「鳩山3原則」が新機軸だった。第1は内閣が与党を懐に取り込む政策決定の一元化だ。法的権限のない与党首脳が実権を持ち、官僚が根回しに歩くのをやめて「閣僚、副大臣、政務官ら内閣に入った政治家が政治的調整をやる鉄則」を明言した。第2は内閣の各省縦割りを排し、首相官邸主導を徹底すること。経済財政諮問会議をなくし、司令塔として「国家戦略局」を新設、官民の人材を募って予算の骨格作りや国家ビジョン策定を担わせるとした。第3は官僚依存から政治主導への転換だ。「官僚叩きや責任の押し付けはしない」現実路線と「政治家の責任」を強調。形骸化した閣議の見直し、テーマごとに少人数の閣僚で政策を詰める英国流の「閣僚委員会」を活用する構想も打ち出した。目を引いたのは「細川連立政権の過ちを繰り返さない」を力説した点だ。当時は7党1会派の寄り合い所帯。全党首が入閣した内閣より、各党幹事長級の与党代表者会議が事実上の最高意思決定機関だった。ここを拠点に権勢を振るった「GHQ」こそ小沢一郎前代表その人だった。それを「失敗」と断言。内閣主導の政権運営を掲げた半面で「小沢氏には必ずしも閣僚になってもらおうと考えているわけではない」とも付言した。首相になれば政策決定の主導権は譲らない。一瞬、のぞかせたひそかな野心。果たして貫けるか。日本経済新聞編集委員

清水 真人



水谷 尚子 みずたに なおこ
中央大学講師

▼ウイグル人が顔を出せる社会に

中国新疆ウイグル自治区の区都ウルムチで7月5日に起きた大規模暴動。これまで中国から海外亡命したウイグル人への聞き取り調査を続けてきた中央大講師の水谷氏が、背景を語った。

同自治区は日本の約4倍の面積を有し、約900万人のウイグル族が住む。隣接するカザフスタンのカザフ人とほぼ同数で、タジキスタンのタジク人やキルギスのキルギス人も多い大規模な民族集団だ。中国は漢民族主体の国家に組み入れ、少数民族と呼んでいるが、世界から見れば決して少数ではない。

その文化も、中央アジアからトルコにかけてのテュルク系民族に近く、ウイグル語とウズベキスタンのウズベク語は、東京弁と大阪弁の差

7・15(水)研究会「ウイグル情勢」
司会 浜本良一委員 出席 94人

ほどの違いしかないのだという。中国の少数民族の中でモンゴル族、キルギス族などはみな中央ユーラシアに国家を持っており、「国家を持たない巨大な民族集団がウイグル族ということになる」との指摘は、独立運動の大きな背景として理解できた。

中国当局は独立派をテロ組織と認定しているが、水谷氏は「アルカイダなどのテロリストとは一線を画して考えるべき」と指摘。ウサマ・ビンラディンの下にいたとされる人物のイスラムの師匠が「イスラム法に則った国を造ろう」というのではない。今のように我々の土地で漢民族に支配されなければそれでいい」と水谷氏が語ったと言う。普通のウイグル族が共有する感情なのだろう。

日本に住むウイグル人約1千人にも話は及んだ。欧米と違い、彼らの政治亡命を基本的に受け入れない日本では中国大使館への抗議活動などで顔を出せば、帰国後すぐ捕まる。今回も一部のウイグル人はマスクなどで顔を隠した。「ウイグル人が顔を出して主張できる社会にしたい」と水谷氏は呼び掛けた。

共同通信外信部

太安 淳一

孫崎 享 まごさき うけり
前防衛大学教授
元イラン大使

▼アフガン問題のジレンマ

「イラク戦争に始まる米国の戦略は大迷走している。アフガニスタンも同じだ。それに協力する日本の姿勢も問題ではないか」

孫崎氏の研究会は冒頭から大胆な問題提起にあふれていた。ウズベキスタンやイランの大使としてアフガニスタンを周辺国から見つめてきた孫崎氏の話は9・11からイラク戦争、日米関係など多岐にわたった。

孫崎氏が最も強調したのは「米国はなぜアフガニスタンで戦っているのか合理的な理由を説明できていない」というものだ。孫崎氏によると、アルカイダが米国を攻撃したのは米軍がメッカとメジナの2つの聖地に駐留していたことに反発したためだが、イラク戦争開始後に米軍がサウジアラビアから撤退したことでアルカイダが米国と戦う理由は消滅した。一方、米国がアフガニスタンで戦っているのはタリバンがアルカイダをかくまっているためだが、アルカイダは今パキスタンに逃げ込み、米軍が駐留するアフガニスタンには戻ってきていない。またタリバンは土

7・15(水)シリーズ研究会「ユーラシア」⑦
司会 石郷岡建委員 出席 62人



着の民族で米国本土を攻撃するつもりはない。テロの中心がパキスタンに移ったのに、なぜオバマ政権がアフガニスタンにこれだけ政治的にコミットするのかよく分からないという指摘だ。米国でも専門家の間で同様の論議が起きているという。

アフガニスタンでは8月の大統領選挙を前に7月初めから米軍の大規模な掃討作戦が始まった。しかし、孫崎氏は「山岳地帯で、軍事作戦がイラクよりはるかに難しく、軍事的な制圧は困難だ」として、「アメリカにとっては時間との戦いだだが、1〜2年でできる問題ではない」と見る。「軍事行動がテロを排除しているのか、テロリストを作っているのか冷静に判断すべきだ」

孫崎氏はこう述べて、アフガニスタン問題はハマスやヒズボラとの和平など中東和平全体につながる形で解決すべきと強調した。

NHK解説主幹

山内 聡彦

にしひら
西平 重喜 日本世論調査協会理事

7・17(金)研究会「世論調査」③
司会 泉宏委員 出席 74人

▼世論調査への過大な期待に警告

戦後まもなく、GHQの指導のもとで「日本人の読み書き能力調査」が実施された。「無作為抽出法」が全国規模で初めて採用された調査であり、西平さんはこの調査に携わったのをきっかけに、日本の世論調査の基礎を固める仕事を積み重ね、重鎮として活躍を続けてこられた。早大で26年間にわたり「社会調査」の講義を担当されたので、会員の方々にも「門下生」が多いはずである。そんな西平さんが、今の世論調査の実態を見て、どう思われるか。山ほどお叱りを受ける覚悟だった。まず驚いた。「日本人は世論調査に向かない」と言われるのである。「日本人は、はっきりした意見を持ち、話す習慣がなかったし、そういう教育を受けていない」「日本語は西欧の言語のようにYes、Noで答える構造ではない。日本人で『いいえ』と、ちゃんと



西平重喜氏

答える人は、ほとんどいないでしょう。だから日本では世論調査といえば『意見』ではなく、『感じ』の調査だ」とおっしゃる。

「日本の世論調査は、賛否を尋ねただけでは満足せず。賛否の理由について追い打ちをかけなければ意味がないといわれるが、そんなことをして相手を困らせないでほしい」

西平さんがそこまではっきりおっしゃるのは、学者の中ではずば抜けて「現場」の経験を数多く積まれているからである。日本で世論調査にかかわる多くの学者は、調査結果の分析に夢中になるあまり、調査の現場に無頓着であり、調査の方法論についても無関心である。そんな中で、西平さんの存在は大きい。

西平さんは今の世論調査の現状について、こう話される。「世間の期待は強すぎて、とてもそれに応じきれない。賛否が五分五分か、6対4か、7対3に割れているかが分かればよいのではないだろうか。世論調査は勝負審判を務めようとしているわけではないし、結論を与えるものでもない」

朝日新聞編集委員 峰久 和哲

エドワード・ライス 在日米軍司令官

7・28(火)昼食会 司会 渡辺 興二郎理事 高畑昭男委員 通 訳 西村好美 出席 107人

▼日米同盟がもたらす利益とは



「在日米軍の再編計画は極めて重要な合意だ。新たな脅威に備えなければいけない」

——在日米軍のライスコ司令官の発言からは、日本とアメリカが3年前に合意した在日米軍の再編計画を着実に実行しなければならぬという並々ならぬ決意を感じた。衆議院選挙を間近に控え、政権交代もささやかれている時期だけに、再編計画の見直しにも言及する民主党をけん制する意味合いもあったのだろう。

ライス司令官は、新たな脅威として、テロや大量破壊兵器の拡散だけでなく、天然資源をめぐる争いを指摘。将来に備えて再編計画を実行することこそが、米軍の作戦に柔軟性をもたらすとともに、沖縄などが抱

える基地負担の軽減にもつながると強調した。北朝鮮の核やミサイル、中国の軍備増強など、在日米軍司令官にとって安全保障上懸念すべき問題も多々あるだろうが、本人は「再編計画こそが最大の課題だ」と言う。「再編計画は全員が満足する合意ではないかもしれないが」。司令官の言葉からは地元住民の理解が得られず計画が頓挫しないかという不安がにじみ出ていた。

ライス司令官のこの日の発言で最も印象的だったのは、「良い同盟関係を築くためには、双方に大きな利益をもたらさなければいけない」という言葉だ。明確な利益がなければ再編計画は実行できないし、同盟も続かない。だが、日米の国民は、今、日米同盟から大きな利益を得ていると感じているだろうか。来年は、日米安全保障条約が締結されて50周年。さらには、オバマ政権になって初のQDR（4年に1度の国防計画の見直し）の年にもあたり、在日米軍のあり方について再び議論が高まるだろう。日米同盟の意義を私も検証したいと思っている。

NHK国際部 油井 秀樹

日本記者クラブホームページ

★いつでも読める丁々発止の「会見速記録」

- ①麻生太郎さんが「解散はそう遠くない時期」ってしゃべったのは、どんなニュアンスだった？
- ②検察捜査と政治をめぐって、どうして検察OBの立場が違うの？
- ③鳩山由紀夫さんと岡田克也さんって考え方は同じなの？

答えはここにあります。クラブのウェブサイトの「会見速記録」。クラブで飛び交った丁々発止のことばを記録に残した。いつでも読める。気軽に読める。ぜひ読んでほしい。

あの時のやりとりは正確に何といったのだろうか。忙しくて出席できなかったが、中身を知りたい。あのひとことを記事に引用したい。せっせと速記録を作るのは、そんな期待に応えるためだ。1969年から積み重ねたさまざまな会見記録こそクラブの誇りだ。財産だ。今年になって新たに31本アップした。

実は手間がかかる。まず、録音したテープを業者に依頼して字に起こす。話ことばのままなので、意味が通じにくい時もある。読みやすくし、見出しをつける。こうした事務局の編集作業のあと、ゲスト本人に再チェックを頼む場合もある。2～3週間もかかる。正確さを優先するためだ。とはいえ、速さも重要だ。最近は会見を司会する企画委員にも編集協力をお願いしている。

①麻生太郎「そう遠くない日」の真意は②堀田力 重大で悪質な犯罪だから逮捕した▽宗像紀夫 検察の役割と政治をめぐって▽村山治 いまの検察執行部は情報開示義務違反重視派③鳩山由紀夫・岡田克也 民主党代表候補討論会

★web版 書いた話・書かなかった話
何十年もしまっておいた「私の取材余話」

つらい話。残しておきたい情景。苦い記憶。甘い思い出。長い記者生活を振り返れば、どなたにもこれまで字にしてこなかった話がおありだろう。6月からウェブサイトに「私の取材余話」のページを作った。何十年も心の底にしまっておいた話を、まず3人の会員からたっぷりいただいた。おもしろい。

ベトナム戦争当時、「第三勢力」といわれた友が亡くなった。友田錫さん（元産経新聞）は40年以上のつきあいを書きとめた。「父娘の悲劇」に息をのむ。（「ある戦争の終わりーアウ・チュン・タンの死」）

「通訳を連れず一人で来なさい」と電話を受け、警戒しながら出かけた。目の前にスカルノ大統領がいた。浅井泰範さん（元朝日新聞）が40年たって初めて活字にしたことば。「やはり」と受け止めるべきか「そんなこと」と驚くべきか。（『歩け、読め、話せ』の功德）

1977年、金正日氏のカラー写真を最初のページに載せたパンフレットが届く。意味がわからない。謎は同僚記者のスクープで解けた。30年間、こつこつと作ってきたファイルを菱木一美さん（元共同通信）は開く。（「金正日ウォッチング」）

ウェブサイト (<http://www.jnpc.or.jp>)についてご意見をお寄せください。リニューアルを考えています。
(中井良則 e-mail:nakai@jnpc.or.jp)

ラビア・カーディル「世界ウイグル会議」 主席の会見に約200人 (7・29 10階ホール)

■日本政府に大きな期待

中国関係の取材はどれも容易ではない。なかでも、少数民族と台湾がからんだ時、思うような取材ができなかったことはない。「統一」を最優先する中国共産党とその政府が、独立や分離を目指す動きに極めて神経質であるためだ。日本から見ると、何もそこまで、と思わざるを得ないほど敏感だ。しかし、理解できなくて、中国を考える時には知っておか



ねばならぬことである。中国の新疆ウイグル自治区ウルムチで起きた7・5騒乱では、胡錦濤国家主席（党総書記）がサミット出席をとりやめてイタリヤから急ぎよ帰国した。亡命ウイグル人組織「世界ウイグル会議」のラビア・カーディル主席に対する中国当局の姿勢も非常に厳しい。民間の招待による来日にもか

かわらず、中国政府は日本政府に厳重に抗議した。そのカーディル主席が記者会見のため姿を見せた。水谷尚子さんの主催でクラブのゲストではなかったが、注目の人の登壇に会場は中国をはじめ内外のメディアで埋まった。ウイグルの帽子であるドッパをかぶった主席は終始、手ぶりを交えて朗々と話したが、来日を認めた日本政府への期待の大きさが印象的だった。「日本政府独自の調査団を派遣してほしい」「中国側に不当な拘束をやめるよう求めてほしい」「中国当

局と対話の場をつくってほしい」。どれも簡単なことではないが、亡命先の米政府が騒乱の後にも中国に厳しい態度に出ていないことが、日本への期待になったようだ。チベットにはダライ・ラマ14世という絶対的なリーダーがいるが、カーディル主席はそういう存在ではなく、世界ウイグル会議も一枚岩でないといわれる。今回の来日で主席の知名度は上がったが、中国当局の主席への対応はさらに厳しくなるのだろう。

朝日新聞論説委員 藤原 秀人

新疆ウイグル暴動

憎悪を増幅させた情報戦略

▼芹田 晋一郎

(共同通信社中国総局)

「漢族だ。漢族がいるぞ」。突然の男の怒鳴り声に振り向くと、鉄パイプを持った2人のウイグル族の男が立っていた。

大規模暴動が起きた中国新疆ウイグル自治区ウルムチ市の大バザール。衝突発生翌日の6日、人けのない建設中のビルに忍び込み、武装警察(武警)部隊による厳戒態勢の様子を隠し撮りしていた時だった。両側から腕をつかまれ、連れて行かれた先はカーテンを下ろし、真っ暗にした高層階の大広間。約50人ものウイグル族の男が、手に手にナイフやこん棒、鉄パイプを持ち、密談していた。

「日本人記者だ」と必死に叫ぶ

部屋に入った瞬間、一斉に男たちが「漢族だぞ」と叫び、激しい憎悪のこもった視線でにらみ付けてくる。十数人が鉄パイプを持っていすから立ち上がり私を取り囲んだ。決して中国語を話さないようにし、パスポ

ートを見せて英語で「私は日本人の記者だ。漢族じゃない」と繰り返す。代表者らしき中年の男が、パスポートを取り上げ、写真までじっくりチェックした揚げ句に「これは偽物だろう」と吐き捨てた。ずっとウイグル語しか話さなかった私の斜め後ろにいた男が、突然中国語で「おまえ、中国語話せるだろう」と聞いてくる。思わず反応して「いや、話せない」と英語で答えてしまった。



競馬場付近のウイグル族居住区
=7月7日 ウルムチ共同

「見てみる、中国語が分かるじゃないか。おまえは絶対に漢族だ」。男は、そう決め付けた後、仲間にもウイグル語で何かを告げる。男たちは一斉にナイフやこん棒を振り上げ、口々に叫び始めた。鉄パイプでコンクリートの床をたたき出す男も。

「北京に住んでいるから、中国語を少し話せるだけだ」。記者証、名刺、クレジットカードまでありとあらゆる身分証を出し、必死で代表者らしき男を説得する。撮影した装甲車や武警の写真や映像もすべて見せ「本当に日本人記者だ」と言い続けること約40分。一応信じた様子で、ようやく解放された。

漢族の遺体が写るDVD

ウルムチ市内の取材で身をもって感じたことは、漢族とウイグル族の民族間の憎しみの激しさだ。だが漢族側の憎悪の火に油を注いだのは、皮肉にも中国当局による情報戦略だった。

暴動発生直後から当局は、新疆ウイグル自治区全体でインターネットや国際電話を遮断。その一方で、暴動を「独立派による残忍な暴力事件」と印象付けるため、ウイグル族が漢族を襲撃する様子や、殺

害された多数の漢族の遺体が写るDVDを国内外メディアに早々に配布。その上、記事や写真を送れるよう、ホテルの一室にプレスセンターを設置し、そこだけはネットが使えるようにする配慮までしてみせた。

昨年3月のチベット暴動の際、外国メディアを強硬手段で排除し、国際社会から厳しい批判を浴びたことを教訓に、積極情報公開によって「世論誘導」しようという意図は明確だ。

国内メディアは、当局の意のままに暴動翌日から繰り返した残酷な場面を報道、在外亡命ウイグル人組織「世界ウイグル会議」のラビア・カーディル主席らが扇動したと徹底非難した。だが報道が漢族の復讐心をたぎらせ、ウイグル族襲撃に向かわせる要因となったことは疑いの余地がない。

中国政府は「暴動は民族政策とは全く関係がない」として、決して少数民族政策の失敗を認めない。だが積もり積もった憎悪の犠牲になったのは、漢族もウイグル族も、ともに何の罪もない一般市民だ。少数民族政策を根本から見直し、本格的な融和策に踏み出さない限り、新疆の人々の未来に光は見えない。

せりた・しんいちろう 1996年入社
名古屋支社編集部 政治部などを経て
07年から中国総局

在京テレビ優先に違和感

▼中山 貴史

(宮崎日日新聞社報道部)

6月19日夕、自民党の古賀誠選対委員長と東国原知事が会談するニュースが流れた。取材に取り掛かると、同党は、知事に総務相ポストを打診し、さらに衆院選での関東地区からの比例代表名簿1位待遇を持ち掛け

ていた。古賀氏が来庁する23日付紙面に「自民、関東比例で出馬要請か」の見出しで記事化した。

知事室前はその日、会談前から報道陣でごった返していた。古賀氏は知事に出馬を打診。これに対して知事は①全国知事会が作成した地方分権の提言を党マニフェストに盛り込む②自身を総裁候補にする③の2条件を逆提示した。選挙区やポストの話は出なかつたという。

各社政治担当の記者に加え、バラエティー番組からスポーツ紙、週刊誌まで多くの記者が宮崎県入りし、報道合戦が繰り広げられた。

連日行われたぶら下がり取材で、知事は「千載一遇のチャンス」とポ

ルテージを上げた。入閣を弾みに出馬表明。自ら「シアター」と名付けた転身劇は、そんな筋書きが透けて見えた。

「転身反対63%」の取材を拒否

宮崎県政記者クラブには13社が加盟し、宮崎日日新聞は、最多の6人を配置している。私は県政を担当して3年目。知事の考えは理解しているつもりだ。

ただ、公務以外での取材は壁にぶつかっている。タレント出身のさかなのか、知事は公務外取材は在京テレビ優先だ。宮日新聞は苦戦を強いられている。知事と地元紙はなれ合いいではいけないが、必要以上に距離を置かれている。この傾向は転身騒動でも現れた。「国政転身反対63%」だった本紙世論調査のコメント取材は拒否。ブログでは社説批判を展開した。

一方で知事は、勝負所で在京テレ



報道陣に囲まれる東国原知事＝7月1日 宮崎県高千穂町

ビ局に生出演し、持論を訴え続けた。古賀氏と会談した6月23日、入閣が見送られた7月1日もそうだ。選挙区になるであろう首都圏のことしか頭にないように映った。

次の知事選の行方に関心

そんな中、在京テレビは洪水のような報道を展開した。しかし、大切なことが抜け落ちていたように感じた。それは、地元宮崎県民の民意だ。県民は一連の騒動を国政転身というより「県政投げ出し」と受け止めて反対していた。また、次の知事選の行方に関心が注がれ始めてもいた。

こうしたローカルな目線は、全国

ニュースには向かないのか、各社ともさらっとしたものだ。だが、知事が自民党から出馬するかどうかについての焦点を当てた報道を展開する在京テレビは、知事にのせられていたのではないか。

ところが、風向きを変えたのもまた、在京メディアだった。7月上旬に発表された全国世論調査では「知事が自民党から出馬することに反対」「自民党の印象が悪くなった」との声が多かった。

これを受けて自民党がトーンダウンし、事態は一気に収束へと向かった。16日、知事は出馬を断念する緊急会見を開いた。自民党から「条件は百パーセントのめない」との書簡が届いたことをその理由に挙げた。県民の民意を一度は捨てていながら、会見の場所が県庁で、県の作業着を身に着けていたことがどこかわざとらしくかった。

翌日、知事を囲む記者の姿はまばらだった。知事は変わり身の早さを見せ、「任期を全うする」と明言した。今後は、モチベーションを保てるかが焦点になる。気を入れ直して見詰め続けたい。

なかやま・たかし 1996年入社 整理部 報道部 えびの支局を経て 2007年から報道部県政担当

皆既日食 7・22

カラ振りツアー客 島のぬくもりが送る

木場 志郎

(南日本新聞社社会部)

今世紀最長、国内で46年ぶりとなった7月22日の皆既日食。絶好の観測地となったトカラ列島・鹿児島県十島村は、7つの島に約650人が暮らす小さな村だ。世界的に注目を集める天体ショーを迎えた現場の息づかいを伝えるため同月11日、7島で最多の観測客780人を受け入れる諏訪之瀬島に入った。

現地の動きで最も気になったのが「入島制限」。村は宿泊施設や水道の能力などから受け入れ可能人数を1500人と決定。業務委託した旅行会社に島民生活に影響を出さない「受益者負担」が原則のツアーを設

定させ、それ以外の入島を認めない方針を打ち出した。しかし、法的根拠はなく、「お願い」のレベル。諏訪之瀬島では11日以降、村営船からツアー外の若者グループが続々と降り立ち、海岸で野営を始めた。

「受け入れのための環境整備費を負担しているツアー客と公平でなくなる」。村の担当職員は各グループのもとに日参し説得。これが奏功し、18日までにすべてのツアー外の観測客は島を離れた。島の強い日差しで真っ赤に日焼けした職員は「追い出すようですらかった。島を嫌いにならないでほしい」と願った。

20日には諏訪之瀬島へのツアー客の第一陣約110人が、客船につぼん丸で到着。約2万2千トの船体は島の小さな港に接岸できないため、沖に停泊。客は一度台船に移り、海上タクシーに乗り換え上陸する。波高や風速の運航基準があり、天候次第で中止する「綱渡り」の作業だったが、1時間半で全員上陸。一方、同じにつぼん丸で22日朝に着いた約430人は、悪天候で上陸中止。村の担当者は「安全を優先するしかない」と苦渋の表情だった。

結局、当日を島で迎えたツアー客

は報道関係者を除くと約100人。島内は朝から曇り空で、皆既時間帯が近づくにつれ、雨、風とも強くなる悪条件。太陽は見えず、観測客のテンションが下がるのを感じた。しかし、皆既になると一転、辺りが一気に漆黒の闇となり、「すごい」とあちこちで歓声が上がった。

約40人の島民は淡々としたもの。多くが小規模な畜産や農業、漁業などの兼業。牛の世話や魚を捕る本業を優先しなければならず、日食には手が回らない様子だった。

その島民らが23日午後、予想外の行動に出た。につぼん丸でツアー客が帰るとき、5隻の船で追走。乗り込んだ1人は「ちゃんと見送りたいか



悪天候の中、皆既時間帯の暗闇を楽しむ諏訪之瀬島の観測客ら

一口メモ 十島村

東シナ海の南北160キロに有人7島が連なる。役場は海を隔てた鹿児島市にあり、最も遠い宝島まで300キロ離れている。戦後、米軍の占領下であり、1952年2月、本土復帰した。交通手段は同市から週2便出る村営船のフェリーのみ。「大物が狙える」と釣りファンには人気がある。



った」。24日には、一度島を離れたツアー外の一団が再び入島。「この島にまた来たかった」と語るメンバーに、島民が次々に声を掛け、笑顔の輪が広がった。島のぬくもりを感じさせる場面が続いた。

人口はピーク時の5分の1、高齢化率は4割に迫る村。取材中、島の将来を心配する声を多く聞いた。観測客が押し寄せ、島民生活への影響が懸念されるとして、村幹部が「天災」と表現したこともある皆既日食。これを「天恵」とし、高まった知名度を生かし、村の未来を切り開けるか。島々の今後を見ていきたい。

こば・しろう 2005年入社 地域報道部を経て社会部

「食料自給率100%」を考える

——まやかしの数字に踊るな



加倉井 弘

日本の農業くらい「表と裏」、「建前と本音」の食い違っている世界は珍しい。だから「書いた話」よりも「書かなかった話」のほうが圧倒的に多い。「なぜ輸入汚染米が食用として流通したのに、国産のカドミウム汚染米は流通しなかったのか」とか、「BSE（いわゆる狂牛病）対策に関して、日米の牛肉は安全性においてほぼ同等であるという見解はどういう意味なのか」「なぜ食品の偽装表示を農水省は取り締まれないのか」といった食の問題から、「6兆円を超えるウルグアイラウンド農業合意対策費はどう使われたのか」とか、「なぜ多くの農家がコメの生産調整に反対なのに農協は賛成なのか」「なぜ都市近郊農家は農地保全の線引きに反対するのか」といった

農の問題まで、多すぎてとても書ききれない。

だから今回は、「食料・農業・農村基本計画」で日本の国家目標とされた「食料自給率」について書くと思う。

● 3倍の農地が必要だ

まず、日本の食料自給率が4割にわたったから日本の食の安全保障が危うくなった、農業振興政策で5割にしたいという現在の国家目標はおろかで無意味である。食料自給率を100分率で表すということは、食料自給率は100%が当然だと考えているということである。だが今の日本人の食料消費を前提とすると、100%自給は絶対に不可能である。食料を作る土地、農地が足りないか

らだ。

もう少し詳しく説明しよう。現在は日本が外国から輸入している穀物は、家畜のえさ用のトウモロコシが1200万トン、小麦が600万トン、大豆が500万トンもある。これを自給するということは、これらの輸入穀物を日本国内で作るということだ。

ではそのために日本国内にどのくらいの農地が必要なのか。農業に詳しい人間なら、それぞれの穀物の「単位面積当たり収量」から計算できる。小麦600万トンを作るには農地が200万ヘクタール必要だし、大豆を500万トン作るには農地が250万ヘクタール必要だ。

このように現在輸入している「主な農産物」を日本国内で作るのに必

要な農地を合計すると、政府の控えめな計算でも1200万ヘクタールになるという。バナナやオレンジ、コーヒーや紅茶、ワインやウイスキーなどの「主な農産物でない」農産物の輸入も含めると、日本の食料自給率を100%にするには、1500万ヘクタールの農地が必要だろう。現在日本にある農地の面積はわずかに500万ヘクタール弱、最近耕作放棄地が目立つとはいえ全部使っている。食料自給率を100%にするには、現存農地のほかに、新たにその3倍の農地が国内に必要になるが、日本列島のどこにそんな土地が残っているのか。

● 食生活の変化、消費2倍の内実

昭和30年代に8割もあつた日本の食料自給率はなぜ4割に減ってしまったのか。それは農業生産が半減したからではない、消費が2倍になったからだ。食料自給率とは、分母が総消費量、分子が国内生産量で計算される数値である。自給率が8割から4割になったのは、分子が半分になったからではなくて、分母が2倍になったからである。

日本の高度経済成長で、国民の食生活は大きく変わった。ご飯と味噌汁と漬物といった伝統的な食事が

ら、肉や卵を食べ、牛乳を飲むように西欧風の食事に变化した。それに応じて日本の農業生産も米・麦・芋中心から畜産物や野菜中心に変わったのだ。この間に、肉用鶏の飼育数が1億羽も増えた。採卵鶏の飼育数は5千万羽増えた。豚の飼育数が5百万頭も増えた。乳牛と肉用牛の数がそれぞれ50万頭ずつ増えた。日本の農地は増えないのに家畜の数が増えたら、家畜に食べさせるエサがない。だから飼料穀物の輸入関税をゼロにして、家畜に食べさせるためのエサの輸入を増やした。だから日本の「カロリーベースの食料自給率」が下がったのだ。

心配症の人のために言っておくが、現在の食料自給率が4割だから、万一食料輸入が途絶すると日本人の4割しか生き残れないという考えは間違っている。エサが輸入できなくなるから、日本で飼われている家畜のほとんどが生き残れないというのが正しい。

では万一食料輸入が途絶した場合に、我々が生き残るための対策は何か。まず配給制度による国民の食料消費の抑制である。スイスは平時には一人当たり3300キロカロリーある食料供給を、危機時には最低必要水準の2300キロカロリー以下

げて配給する計画である。現在、日本人の食料供給量は一人当たり2500キロカロリー程度あるが、今は家畜のエサや野菜や花などを作っている農地に、穀物や芋類などの熱量効率の高い作物を作れば、一人当たり1900から2000キロカロリーの熱量供給が可能とされている（出典は農水省の食料自給率レポート）。

なお日本は、太平洋戦争の終戦後に深刻な食料危機を経験したが、昭和21年の供給ベースの一人当たり熱量は1448キロカロリーだったという（農水省・食料需給表）。今の日本の食料自給率目標は、輸入途絶といった食料供給危機を担保するものとはなっていない。ほぼ無関係といってもいい。

● 国家目標は永遠に：

実はこの食料自給率を国が数値目標として発表することにはためらいがあった。農林官僚と学者は反対だったのだ。だが、消費者団体と農業団体の強い圧力に負けて採用してしまったのだ。

ところが実際にやってみると、最初から予想されていたことだが、食料自給率向上目標はいつこうに達成されなかった。農水省は国民の食料

消費量をコントロールできないし、農業生産の面から見ても、農地の面積が限られているのに穀物の生産量を何倍にも増やす術などありえないからだ。

さらに日本で一番大切な作物であるコメの場合は、零細規模の分散された水田を所有する多数の兼業農家がパートタイマー的に生産を担当しているため、国際価格の10倍を超えているという点でもなく高い国内価格を引き下げられる可能性はない。だから、国内でコメの消費量は減り続け、やむを得ず生産調整するから生産量が減り続ける。これで食料自給率が上がるはずがない。食料自給率目標は「まぼろし」もしくは「まやかし」にすぎない。



さて最後に、農業を正しく考える練習として、「やっつてはいけないが、日本の食料自給率が確実に上がる政策」をご披露しよう。

①「侵略戦争をやって日本の農地を増やすこと」→なんといいっても日本の国民1人当たりの農地の面積は英国の8分の1、フランスの13分の1しかないのだから。ただし太平洋戦争の際の日本の戦死者は200万人以上といわれている。

②「日本の人口を減らすこと」→江

戸時代の日本の人口は3千万人から4千万人といわれているが、食料自給率は100%だった。ただし庶民の食事は貧しく、畜産物はまったく食卓にはあがらない「一汁一菜」が基本だった。それでも江戸時代の食料不足は深刻で、日本各地で飢饉が相次ぎ、多くの餓死者が出たという記録が残っている。

③「日本が貧乏になること」→日本の食料輸入が加速したのは、貿易収支の黒字が常態化してからである。「加工貿易」に依存している日本の工業技術が、ひとたび国際競争力を失えば、外国から食料を買う購買力は消えてなくなる。

④「江戸時代の鎖国に戻ること」→ただしそれでは食料も入らないが、石油や石炭や鉄鉱石も入らない。そこで食料は輸入しないが石油は入れたいというのなら、国際ルールにばられないようWTOから脱退することだ。これは日本の国益に反する行為とは思わうか。

いかがでしょうか。

かくらい・ひろし会員 1936年生まれ 60年NHK入局 農林水産番組班チーフプロデューサー（「明るい農村」担当）、解説委員など 95年退局後 農政ジャーナリストとして活動

マイBOOK
マイPR

米原万里を語る

金平 茂紀 共著

(TBSテレビアメリカ総局長) さわやかな毒舌とユーモア 米原万里さんがこの世を旅立たれたのは、2006年5月。まだ56歳だった。

実妹の井上ユリさんと義弟の井上ひさしさんに加え、万里さんと「義兄弟」の盃を交わした吉岡忍さん、小森陽一さんのお二人、そして義弟というよりは「贗弟・偽弟・愚弟」であった小生の計5人が、万里さんを自分流に偲んだら、こんな本になった。さわやかな毒舌と研ぎ澄まされたユーモアが今という息苦しい時代にこそどんなに必要であることか。乞ご一読。

(かもがわ出版 1、575円)

記者風伝

河谷 史夫

(朝日新聞記者)

新聞の申し子たち 新聞が輝き、新聞記者たちが生き生きとしていた時代があった。見ると、新聞記者は血まみれだ。

抜いた抜かれたの現場で切った張ったの記者は、返り血も浴びて全身赤く染まり、コラムの現場に立つ記

者は文章に秘術を尽くして人知れず血の汗を流している。

「新聞の申し子」というべき記者たちである。そのうちの24人の略伝を書き、列伝では司馬遷に悪いから「風伝」とした。むろん、身の程をわきまえぬことである。

(朝日新聞出版 1、890円)

ベトナム戦場再訪

北畠 霞 共著

(毎日新聞出身)

ゲリラ兵士との再会 ベトナム戦争を追いかけていた特派員時代、サイゴンのすぐ西方のところ、解放戦線のゲリラ兵士に一時身柄を拘束されたことがあった。身なりから彼らは地元の村の兵士と判断し、戦争が終わり、時間がきたら捜すことを長らく温めていた。

リタイアしてから、2年前にその一人を探し出し、当時のことを思い出しあうことができた。この話を基に、ゲリラの戦いぶり、ベトナム戦争の芽、米国防退の背景をまとめたのがこの本である。共著者はカメラマンで多数の写真を収めている。

(連合出版 2、310円)

日本の基本問題を考えてみよう

中馬 清福

(信濃毎日新聞主筆)

若者たちに期待して 信濃毎日新聞に連載中の大型コラム「考」を読んだ編集者に、こんな調子で書いてみたら、と勧められてこの本はできました。自分のこれまでをさらけ出した、全文これ若者へのメッセージですから、現役やOBの記者のみならず、読んでいただくのは恐れ多いことです。立ち読みされて、じゃあ、子か孫に買ってやるか、と思っただければ幸いです。なお、「考」をまとめた本も2冊目が同じ新聞社から出版されました。

(岩波ジュニア新書 819円)

オバマのアメリカはどこへ行く

蓮見 博昭

(時事通信出身)

宗教関係に力点置く アメリカの主な分野の近況とそれについてのオバマ新大統領ないし同政権の考え方・施策を簡潔・平易に紹介・解説し、近未来の展望を試みた。

日本でもオバマ本はすでに数多く出版されているが、その中で本書に特色があるとすれば、宗教(キリスト教)関係に力点を置いたことだろう。講演の記録や雑誌論文を集め、

大幅に加筆修正して単行本化した。アメリカは今後も「相対的衰退」を続けていくものと予測、オバマの改革や危機対策が失敗すれば、本格的衰退も不可避なのではないか、と警告している。

(梨の木舎 1、890円)

グリーン・リカバリー 日本再生の新シナリオ

三橋 規宏

(日本経済新聞出身)

最速出版の記念の書です 「変化恐怖症」ニッポン」というタイトルの本の執筆を9割近く書き上げた時、リーマン・ショックが起こった。100年に一度の世界同時不況が日本にも押し寄せ、日本も生き残りのために思い切った変化を迫られた。執筆中の本は一日で陳腐化し、幻の本になってしまった。

日本が大変身しない限り、今度の不況から脱出することはできない。そのための処方箋を書こう。気持ち切り換え、一気に書き上げたのが本書である。5月初めに出版社に原稿を持ち込み、同日20日過ぎに書店に並んだ。私の最速出版の記念の書でもある。

(日本経済新聞出版 1、680円)

私がお会った 木下順二さん

リレー⑨

最後にお会いしたのは亡くなる一年半ほど前、公共劇場での「子午線の祀り」上演の報告をするためだった。応接間の椅子に座られた先生は九十歳を超えておられただろうが、こんなにも美しい老人に久方ぶりに

お目にかかると思つた。具合がよければ夕食に鰻でも、

という話を事前にしてくださったのだが、しばらくして「耳鳴りがして…」と引き取られた。

交渉は養女として木下先生が身の回り一切を任せておられた新藤とみ子さんとすることになった。先生は前に電話でお話した時も新藤さんについて、「この人は茶

道の勉強をしていたのに私のために奉仕をしてくれて…」と繰り返し感謝しておられた。

この時を含めると、木下先生にお目にかかったのは四度。一度は「山本安英の会」での勉強会、本郷の喫茶店が会場だっただろうか、「シェークスピアのことば」が主題だった。シェークスピア自身が創作した英語が相当ある、そのほとんどが馬に関係

——老いて美しく——

そして、くさやの干物の思い出も

することはだ、と。例としてtrot（早足で駆ける）という英語を楽しそうにあげられた。ご自身も馬が大好きだった。二度目はNHK教育テレビが、いまだ、実験的であることが許されていたころ、「文芸ジャーナル」という番組で、何回目かが木下先生と大江健三郎、開高健の

鼎談だった。下手でいい、好奇心に満ちた目をした新人がいいというプロデューサーの希望で、私が聞き手となった。

番組終了後、夜の新宿に繰り出し飲み屋で木下先生が盛んにくさやの干物を「食べる、食べる」とすすめてくださった。食通でいらしたのだと思うが、そのにおいとともに、忘れられない思い出である。

■永井多恵子

三度目、これは東京芸術劇場で中国版の「夕鶴」が上演された折のこと。先生は山本安英さんの思い出もあってか、「夕鶴」が自分の手を離れて違ったものになってしまうことに神経質だった。

初日の幕が降り、評論家の尾崎宏次さんも木下さんの表情を気にされていた。中国の出演者がいまだ、舞台に残っている時、袖から入って、一言「よかった」とぼそっと、おっしゃった。若干の原作者としての戸惑いと中国側への気遣いを私は感じ

取ったが、周囲がほっとしたのを憶えている。

そして四度目、私が公共劇場の運営にかかわり、どうしても上演したかったのは叙事詩劇「子午線の祀り」である。宇宙的な視野から源平のつまりは人間の争いを見ろという、このような壮大な詩劇は二度と出ない。

最後に、「二十一世紀にも受け継がれる演劇として、また、再演させてほしい」とお願いした。「いいです」。そしてこれは新藤さんからの助言によるものだろうが、「演出は今後、野村萬斎が中心でもいい」とまでおっしゃった。「次回は永井とまた、来てほしい」というのが最後の伝言だった。



（早足で駆ける）という英語を楽しそうにあげられた。ご自身も馬が大好きだった。二度目はNHK教育テレビが、いまだ、実験的であることが許されていたころ、「文芸ジャーナル」という番組で、何回目かが木下先生と大江健三郎、開高健の



ながい・たえこ
会員（元NHK副会長）

写真 執筆の合間に、自宅でインタビューに応じる。2001年6月。共同通信社提供

プロレタリア文学の古典の映画化だが、世代によって受けとめ方は相当違うのではないか。古い世代は、時代体験を思い起こし、世界恐慌の年、1928年に出版されたこの労働者残酷物語をオンリーイエステタの物語として述懐したかもしれない。20代、30代世代は若者が雇用調整のしわ寄せをうけてロスジェネレーションになりかかっている現在の不況とイメージを重ねたかもしれない。40代半ばのSABU監督は中間世代だが、この深刻な労働者の団結・蜂起物語を現代的でポップな映像に再構築してみせた。オペラを徹底的にデフォルメして原作から離れすぎるくらいのある宮本亜門の演出には、「そこまで原作を軽視するならば、自分でオリジナルを作ってみる」とでも言いたい気がするが、この作品は原作の核心をつかんでいるようだ。SABU監督自身は映画化が決まってから初めて原作に触れたそうだが。

蟹工船 (6. 29)



考えろ、そして行動しろ

「格差社会」「派遣切り」などが社会問題とし浮上するなかで「蟹工船」は昨年の流行語大賞TOP10にも選ばれ、80年も前の原作がにわかにはストセラーになった。SABU監督は「この映画で一番大事な台詞はうさん臭い中国人通訳の言ったことば、『怖がって何もしないのが一番いけない。自分で考えて、自分で行動するしかない』」と強調する。映画には男だけが登場しないが、松田龍平はじめ格好がいい若者ばかりだ。衣装もモダンで、時代色が意図的に薄められている感じがする。若い世代に夢を与えられない今の政治は落第である。だが、それにしても若い世代に元気がない。何も考えない自暴自棄の犯罪も目立つ。可能性の芽を自分で摘んでしまっている。「考えろ、そして行動しろ」が原作と監督からのメッセージであることをかみしめてほしいと思うのだが。

日本経済新聞出身 小島 明
©2009「蟹工船」製作委員会

中国の革命家孫文を描いた中国映画は約20年前にも一大伝記として製作されたが、今回の作品はマレーシア（当時は英領マレー）のペナンに滞在していた約半年間に絞って描いている。清朝の暗殺団に狙われながらも革命資金の調達を図る一方で、献身的に仕える看護婦との愛も盛り込んでおり、スリルとラブロマンスの展開となっている。

孫文 100年先を見た男 (7. 28)



革命いまだ成らず

孫文が日本からペナンに渡ったのは99年前の1910年で、辛亥革命の1年前だった。9度目の武装蜂起が失敗し、最も苦しく、厳しい時期に当たる。映画はペナンでの逆境の時期こそが孫文にとって革命への力が養われていたときだったと位置付けている。映画のクライマックスシーンは、革命資金の提供を渋る華僑の前に革命の必要性を訴える演説をする孫文と、銃で狙う暗殺者、それを阻止しようとする看護婦の活躍だ。英領ペナンのエキゾチックな風景

を背景に、自由奔放に生きる有力華僑の娘、孫文の暗殺を謀るそのフィアンセを登場させて、娯楽性を盛り込ませている。監督は香港出身のニユーウェーブの趙崇基氏だけあって、中国映画というよりはハリウッド的なつくりを感じさせる。去年はキューバの革命家チェ・ゲバラを描いた映画が上映されており、革命家を主人公にした映画が相次ぐ。今の時代が大変革の激動期に差しかわり、革命家に共感をおぼえやすいからだろうか。中国は国内総生産（GDP）が日本を抜いて世界第2位になる」としており、米中2極時代の到来を感じさせる。だがチベットやウイグルの暴動などをみると、孫文の「革命いまだ成らず」の言葉が今も別の響きを感じさせてしまう。共同通信客員論説委員

安尾 芳典
©深圳電影製片廠



■「世界人口デー」記念会見
お母さんたちの命を守ろう

毎年7月11日は「世界人口デー」。国連が1987年に世界で50億人目の赤ちゃんが誕生したことを記念して制定、

90年から世界各地でこの日を中心に様々な行事を行っている。日本では7月7日、10階ホールに売れっ子の経済評論家・勝間和代さん(写真左)を招いて池上清子・国連人口基金東京事務所代表(同中央)と「経済危機とお母さんの命」をテーマに対談した。

勝間さんはビジネス作家10人で印税の20%を寄付して途上国女性の教育支援、自立支援を進めている「Chabo」の活動を紹介。現場を訪れたスーダン、スリランカの女性たちを例にODA(政府開発援助)を箱物中心から、医療従事者や薬の供給を充実させるようソフト化を図る、現地の特産物に付加価値をつけて商品化、女性の雇用を生み出す直接投資、家族計画を普及させ、同時に子どもたちにコミュニティー文化を伝承させるため女性に識字と権利意識を持たせる教育の重要性を強調した。経済専門家らしく女性への投資が男性を含めた国の開発に得策

であること、女性たちには穀物より利幅の大きい野菜の栽培技術を移転する利点を挙げた。

最後に人口問題協議会、ジョイセフ会長の明石康さん(写真右)が「女性への投資は少子高齢化に悩む先進国にとってもカギになる。50億人目の赤ちゃんはユーゴスラビア、60億人目はボスニア・ヘルツェゴビナという紛争地で生まれたとされるが、2012年と予想される70億人目は平和の地で生まれてほしい」と締めくくった。

毎日新聞出身 尾崎美千生
(人口問題協議会代表幹事)

△理事交代▽

山形新聞社

(新) 柴田 隆 取締役東京支社長

(旧) 塩野寿伸

△監事交代▽

北海道放送

(新) 溝口博史 取締役東京支社長

(旧) 山田伴一

◆会議報告◆

第304回会報委員会

(7・8 小会議室)

8月号、9月号の編集について協議した。

出席 小西、近藤、菅谷、富田、羽

原、枇杷田、堀、八木の各委員。

第183回施設運営委員会

(7・9 小会議室)

5月、6月のアラスカ売り上げと貸室利用状況について事務局が報告

した。夏の臨時措置として慣例にな

っているお盆期間の短縮営業と8月

の部屋代半額の実施を、さらにラウ

ンジの書棚に置く定期購読誌の追加

を決めた。

出席 渡辺委員長、高橋、畑野、広

江、柏木、國府、佐藤、阿部、塚田

の各委員。

第383回会員資格委員会

(7・16 小会議室)

8月1日付の会員入退会を審議し、理事会に答申した。

出席 朝倉委員長、布施、松田、金子、坂本、齋藤、大沼、若松の各委員。

第389回企画委員会

(7・29 大会議室)

司会担当の委員が行事を報告した後、衆院選公示日前日に開催する「6

党党首討論会」について協議したほか、今後のゲスト候補などについて

意見を交換した。

出席 船橋委員長、宮田(謙)、倉重、坂東、橋本、脇、原田、宮田(一)、

高畑、長谷川、会田、田崎、川戸、

井田、和田、川村、広瀬、石郷岡、泉、瀬川の各委員。

第474回理事会(書面)

①故平田真己会員(元共同通信論説委員長)の遺言執行人・戸塚洋子さんからの寄付金100万円をクラブ賞規約の付則に従い、クラブ賞基金に繰り入れることを承認した。

②創立40周年記念パーティーを11月4日(水)午後5時30分から、10階ホールとレストランを使い、開催することを決定した。

③上記の役員の一部交代を了承した。

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■エッセイスト・クラブ賞贈賞式

日本エッセイスト・クラブ(村尾清一会長 <http://essayistclub.jp/>)が贈賞式を行った。受賞は平川祐弘氏(『アーサー・ウェイリー『源氏物語』の翻訳者』白水社)、池谷薫氏(『人間を撮る—ドキュメンタリーがうまれる瞬間(とき)』平凡社)の2作品。池谷氏は「延安の娘」「蟻の兵隊」などの作品があるドキュメンタリー映画監督(いずれもクラブで試写会を行っている)で、受賞作はその制作過程のドラマをつづったもの。(7.8 宴会場)

■シンポジウム「政権選択と地方分権改革」

日本自治学会(神野直彦会長 <http://www.nihonjichi.jp/>)の主催で、玄葉光一郎・民主党衆院議員、新藤宗幸・千葉大教授、西尾勝・東京市政調査会理事長、野田毅・自民党衆院議員、山田啓二・京都府知事、城本勝・NHK解説委員(司会)が討論を行った。(7.11 10Fホール)

■マス倫懇全国協議会50周年記念講演

マスコミ倫理懇談会全国協議会設立50周年を記念し、浜田純一・東大総長が「メディアの公共性と主体性」のテーマで講演した。同協議会はマスコミの倫理向上と言論の自由の確保を目的に58年に設立、現在224の新聞社、放送局、出版社で構成されている。(7.13 宴会場)

■小池和男氏に吉野作造賞

第10回読売・吉野作造賞が『日本産業社会の「神話」』(日本経済新聞出版社)の小池和男・法政大名誉教授に贈られた。小池氏の専門は労働経済学。受賞作は、「集団主義」「会社人間」といった日本の労働に関する通念が誤りであることを実証的に分析している。(7.14 10Fホール)

■竹中平蔵氏講演「構造改革」で地平をひらこう

未来をひらく日本委員会(尾畑雅美代表 <http://www.nihoniinkai.com/>)で、竹中平蔵氏が講演した。(7.16 10Fホール)

■人身取引に関する特別報告者の会見

国連の人身取引(特に女性と子ども)に関する特別報告者のジョイ・ヌゴジ・エゼイロ氏が会見した。エゼイロ氏は日本での被害者の人権などの調査のため来日していた(7/12~18)。日本の問題として、主にアジアからの被害者が性的な仕事を強制されたり、研修制度の名目で低賃金で働かされていることなどを指摘、法整備や、多言語に対応できる保護施設の設置、人身取引を禁じたパレルモ議定書への早期批准などを求めた。(7.17 宴会場)

■緒方貞子さんに後藤新平賞

後藤新平の会(<http://goto-shimpei.org/>)が緒方貞子JICA理事長に後藤新平賞を贈った。国連難民高等弁務官などとしての長年の国際貢献を評価したもの。授賞式の後、新平没後80周年記念シンポジウムを開催した。(7.18 10Fホール)

■職場のパワーハラスメント対策

日本生産性本部(牛尾治朗会長 <http://www.jpcc-sed.or.jp/>)が、労働ジャーナリストの金子雅臣氏を招き、パワーハラについての研究会を行った。(7.21 10Fホール)

■政局の行方、見どころ

日本ジャーナリスト懇話会(竹田純会長)で、総選挙の展望、選挙後の課題などについて星浩・朝日新聞編集委員が講演した。毎月の例会の詳細は懇話会会報に掲載されている。(7.24 大会議室)

■討論会「国民はどのような新政権を求めているか」

新しいOB会員



あいざわ ともつよ
▼相澤 与剛

1973年時事通信入社。出版局図書編集部長、同出版編集部長、同総務、(株)時事通信出版局常務取締役など。

通信社に働き、主に出版分野で取材・編集に携わってきました。培ってきたものを生かし、執筆・編集活動を継続していこうと思います。よろしく。



いずみ ひろし
▼泉 宏

1972年時事通信入社。政治部長、編集局総務兼解説委員、福岡支社長、取締役編集・国際担当など。

永田町や霞が関を徘徊し、政局の表裏を見続けた36年余。「なんでもあり」の現在の政治は「未知との遭遇」というより「勝手にしやがれ」という心境。



うえの みのり
▼上野 稔

1970年東海ラジオ放送入社。東京支社営業部長、営業局長、取締役営業担当兼東京支社長など。

40年のラジオ局での生活を終え、先輩や現役の皆様からアドバイスをいただきながら、少しでも社会に貢献できればと考えています。



なかむら まもる
▼中村 守

1963年共同テレビジョン入社。1972年からフジテレビジョン報道局。編集長、報道局長、取締役、扶桑社社長など。

どうぞよろしくお願ひ申し上げます。



なかもと たかみち
▼中元 孝迪

1964年神戸新聞入社。論説委員長、常勤監査役論説顧問、論説特別顧問などを経て05年から姫路獨協大学副学長。

出戻りの心境です。ジャーナリズムと政治の動きの中で、地域をじっくり見直したいと思っています。よろしくお願ひします。



やまき ひろゆき
▼八牧 浩行

1971年時事通信入社。ロンドン特派員、経済部長、社長室長、常務取締役編集局長などを経て時事総合研究所客員研究員

原点に立ち返り、内外の混沌とした諸情勢を分析し、可能な限り集大成していきたいと思ひます。よろしくお願ひします。

総選挙を前に、マスコミ9条の会が新政権のあり方について討論会を開催した。民主、共産、社民の各党の代表者が総選挙への抱負と重点政策を述べた後、作家の辻井喬氏、評論家の前田哲男氏も参加して討論を行った。(7.30 10Fホール)

■放送人政治懇話会

次のようにゲストを招いた。志位和夫・共産党委員長(7.1)、野田佳彦・民主党幹事長代理(7.8)、渡辺喜美・衆院議員(7.15)。

バー、レストラン、宴会

予約電話 和食3503-2723 洋食3503-2766

和食

松茸懐石 8月17日～10月9日

突き出し・豆腐3種、土瓶蒸し、鯛うす造り、焼松茸、鱈杉板焼き、松茸と秋野菜天ぷら、松茸ごはん、季節の水菓子 (5,250円)

洋食

31日まで半額サービス 10階アラスカ

今月は10階レストランの一般メニュー(夜の部)をすべて半額で提供しています(サービス料は別)。シェフのお薦めディナーコース(オードブル2品、スープ、和牛ステーキ、デザート)は通常12,600円が6,300円です。この機会にご利用ください。予約をお願いします。(シェフ 黒須修一)

<法人代表変更>

日刊スポーツ新聞社 (新)	三浦基裕	代表取締役社長
	(旧) 川田員之	
日本農業新聞	(新) 松原 博	代表取締役社長
	(旧) 菅原哲朗	
日経ラジオ社	(新) 鈴木健司	代表取締役社長
	(旧) 小林 樹	
テレビ朝日	(新) 早河 洋	代表取締役社長
	(旧) 君和田正夫	
ピーエスフジ	(新) 北林由孝	代表取締役社長
	(旧) 波久圭司	
信越放送	(新) 中澤哲哉	情報センター長
	(旧) 中島克彦	
静岡放送	(新) 桂 英治	常務取締役兼テレビ局長
	(旧) 石山隆治	
四国放送	(新) 漆原完次	代表取締役社長
	(旧) 近藤 守	
RKB毎日放送	(新) 井上良次	取締役東京支社長
	(旧) 黒木 淳	
衛星チャンネル	(新) 川原徹郎	代表取締役社長
	(旧) 高橋 勝	

<訃報>

出田裕会員 (個人D・中日新聞OB、83歳) が7月11日に死去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

<会員現況> 法人会員 141社 基本会員 775人
個人会員 1,538人 法人・個人賛助会員 69社 175人
特別賛助会員 81人 名誉・功労会員 9人
計 210社 2,578人

クラブの電話 ダイヤルイン

和食レストラン (9階)	会員事務	
3503-2723		3503-2725
洋食レストラン (10階)	経 理	
3503-2766		3503-2728
貸室予約、宴会打ち合わせ	クラブ行事への申し込み	
3503-2724		3503-2722
受 付	会见申し込みアドレス	
3503-2721		kaiken@jnpc.or.jp

会報委員会

委員長=住田良能
委員=小西美和子 近藤憲明 菅谷 齊 富田 恵
羽原清雅 枇杷田裕 堀 徹男 村澤繁夫
八木浩幸
連絡=長谷川和子 本庄五月
(電話 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271)

ホールご案内

会員社のホールで開催されるコンサートなどの情報を紹介します。

●日経ホール

♪9/22 (火) プレミアムジャズ Vol.2 「ダイナミックジャズ」
おとなのためのジャズコンサート。ジョージ川口Jr.&NEWBIG4、秋満義孝、清水万紀夫、八城邦義、稲葉国光、金子晴美ほか (7,350円)
問い合わせ: 03-5281-8074
<http://www.nikkei-hall.com/>

●サントリーホール

♪10/7 (水) 正午(ひる)の名曲定期便〜ザ・ベース・ギャング〜コントラバスの妙技〜
コントラバス四重奏によるラテン・ベース・メドレーなど (4,000円 ランチセット券8,000円)
チケットセンター: 03-3584-9999

●王子ホール

♪9/24 (木) サンセヴェリーノ
渋い歌声・サンセヴェリーノのシャンソンでパリのライブハウスのような洒落たコンサート (6,000円)
問い合わせ: 03-3567-9990

東北電力が入会しました

8月1日付で法人賛助会員として東北電力が入会しました。すでに東京、中部、関西の3電力会社は会員です。低炭素社会移行に向け原発やエネルギー問題に関心が高まる中、記者発表やメディアとの交流の場としてクラブを利用してもらえると思います。住所・登録会員は下記の通りです。
100-0005 千代田区丸の内1-8-2 (03-3231-3501)
長谷川登・執行役員東京支社長
宮本保彦・東京支社副支社長

「信頼される男」クロンカイト氏の「会見速記録」

7月17日、92歳で死去したウォルター・クロンカイト氏は1981年5月、クラブでジャーナリスト仲間である会員と率直な意見交換を行っています。米CBS「イブニングニュース」キャスターを降板して2カ月後の来日でした。クラブHPの資料室へアクセスを。

HP <http://www.jnpc.or.jp/>

資料室 「会見速記録」: 7月の新規掲載

●鳩山由紀夫民主党代表記者会見 (7.10) ●峰久和哲朝日新聞編集委員「世論調査の役割と限界」(6.26) ●麻生太郎首相「『そう遠くない日』の真意は」(6.25) ●福島みずほ社民党党首「『だから社民党』と意気込み語る」(6.24) ●尾見茂自治医大教授「新型インフルエンザ」(6.24) ●蓮池透氏 著者と語る『拉致』(6.18) ●志位和夫日本共産党委員長「総選挙へ向けての二つの旗印」(6.10)

今後の行事予定 (8/3現在)

- 8.17 (月) 13:00~15:00 (10階ホール)
6党党首討論会
- 8.24 (月) 15:00~16:30 (9階宴会場)
研究会「オバマのアメリカ」⑧
渡辺将人 ジョージワシントン大学客員研究員

行事案内専用電話 03-3503-3764

日時の変更なども含め、最新のクラブ行事をテープでお知らせしています。

写真回廊

撮影 鈴木 大介 (すずき・だいすけ 共同通信写真部)



ノムさんの人間教育

ボヤキが専売特許の楽天・野村監督が、珍しや満面笑顔でキャッチャーミットを構えている。マー君はグラブも持っていない。そうか、これはセレモニーか。

7月8日、Kスタ宮城の対ロッテ戦の始球式で、仙台在住の沼田早苗さん(24)が、田中投手に車イスを押ししてもらい始球式のボールを投げた。沼田さんは全身の筋肉が徐々に動かなくなる筋萎縮性側索硬化症だという。マウンドと本塁の間ぐらいの位置から投げたボールは、転がって野村監督のミットに納まった。

彼女は「一生の思い出です。同じ境遇の人たちにもチャンスが与えられれば…」と感謝の面持ちで語ったそうだ。

野村監督といえば選手の人間教育に励んでいることで知られているが、「いまの選手に最も欠けているものは何か、それは感謝の心だ」と指摘する。著書『野村ノート』(2005年、小学館刊)で、ヤクルト時代のことを書いているのが興味深い。

「日本には年賀状や暑中見舞いという風習がある。多くの選手が年賀状くらいちゃんと寄りますが、古田からは年賀状一枚来ない。言葉がなければ何も伝わらない」

へえ、そうなのか。人間てわからないものだなあと思うのだった。

(石井 英夫)